ライトノベルシリーズ1

雨降らしの妹

#1 雨降らしの妹

リンリンリンリンリン。

森林木（もりばやしぼく）は眠たい瞼をこすって「あっちゃーもうこんな時間か」と言った。

枕元で鳴っている時計を取り上げて見るともう八時十五分を過ぎていた。

学校は八時半からで、学校までは急いでも自転車で三十分はかかるから完全に遅刻である。

階段を駆け降りて「ハハどうして起こしてくれなかった！」と台所に立つ母の背中に向かって木は叫んだ。

母は振り返って「大きな声出してどうしたの」と言った。

「どうして起こしてくれなかったんだよー」と言って木は席について用意されていた朝食を急いで掻きこんだ。

朝食は味噌汁に白いご飯に鮭と納豆だった。

木は急いで納豆のふたを開けて中の透明なシートを納豆が手につかないように取り出してそれを切り取ったふたの裏にくっつけて、納豆をかきまぜてご飯の上に乗せてから

残ったパックにテーブルの上に裏返して置かれたふたをまたくっつけると、納豆のねばねばでふたと残りのパックはくっついて離れなくなるから手が汚れずに済む。

今日はうまくいったぞと木は思った。

「幸先がいいなあ！」木は急いで納豆ご飯を口の中に放り込んだ。ご飯を放り込んでは、鮭を食べ、味噌汁を飲み、また放り込んだ。

「チチはどうしたの？」と母に尋ねると「また地下室で何か作ってるみたい」と言った。

「ふーん、そうか熱心だなあ！」

「何がそんなに面白いのかねえ！」

「やっべえ、遅刻だ！」木は洗面所に向かい急いで顔を洗った。「はあ、さっぱりした！」

歯を磨きながら鏡を見て、髪がぼさぼさだなあと思った。しかし髪なんか気にしてる場合じゃない。

「髪をとかしてるだけで一分は時間ロスだ」木は鏡を見たまま無言で歯を磨いていた。おかしいなあと木は思った。

「おかしいなあ」木は無言で鏡を見たまま歯を磨いているだけだった。おかしいなあと木は思った。歯を磨いてるだけのはずなのに僕がしゃべってるぞと木は思った。

すると「おかしいなあ。歯を磨いてるだけなのに僕がしゃべってるぞ」という声が聞こえてきた。おかしいなあと木は思った。

「おかしいなあ」という声が聞こえてきた。木が歯を磨き終え急いで制服に着替えに二階に戻ろうとすると、入り口のところに何かが立っていた。

しかし木はあまり眼が良くないくせに眼鏡をかけていないからぼやけてそれがなんなのかはっきりとはわからなかった。なんだあれは。

「なんだあれは」という声が聞こえてきた。どうやら声の発信源はあれらしいということがわかる。ははーん、またチチが変な物つくったなとようやく察しがついた。

「ははーん、またチチが変な物つくったな」とそれが言った。

「チチー、チチー！どこにいるの！これはなんだよ！」と木が叫ぶと、

「ほーい」と遠くからチチの声が聞こえた。リビングでご飯を食べているらしい。

「チチー！これはなんだよ！」

「本人に直接聞いてくれ！チチはご飯食べてテレビ見てるよ！」

木は声の発信源に近づいてみた。するとそれが人間の少女の姿をしていることがわかった。

「年齢設定は同年齢くらいみたいだな」と木が思うと同時にそれから声が聞こえてきた。自分と同じ高校の制服を着ている。

「チチの趣味がわからないなあ！」と木が思うと同時に少女から声が聞こえてきた。

「ねえ、君はなんなの！」

「私は雨降らしの妹です」とそれは人間のように滑らかな唇を動かして言った。

「私は思考反復装置のプロトタイプです。有機生命体から生じる電気的磁気的シグナルを、電算機に蓄積されたシグナルパターンと照合し抽出された解析結果を音声として

出力します」

「へえ、それはどういうこと！なんだろう！」

「人の考えが筒抜けになります」

「そうなのか！なんだろう、それは！すごいね！」木は驚いてすごいなあと思った。

すると「すごいなあ」とそれが声を出した。

「君の名前はなんというの？」

「雨降らしの妹です」

「長いね！どうせチチの趣味なんでしょ」

「今日から学校に行くことになりました。よろしくお願いします」

「今日からって本当かい！早く行かないと遅刻してしまうよ！」木はリビングのほうに向かって、「どうしてもっと早く紹介してくれなかったんだよ！」と言った。

「学校に案内してあげてくれー！」とリビングのほうから声だけが返ってきた。

「早く学校に馴染めるといいなあ！」と雨降らしの妹が声を出した。

「そうだね、きっとすぐ慣れるよ！」木が言うと「私の考えではありません」と雨降らしの妹が言う。

「そうなの！じゃあチチが考えたのかな！」

雨降らしの妹は黙って木のほうを見つめている。

「それじゃあ学校に行こうか！早くしないと遅刻だよ！」

「その前に制服に着替えなくては」と雨降らしの妹が言った。

「そうだった！ありがとうすっかり忘れてたよ！」二階に駆け上り時計を見るともう八時半をとっくに過ぎていた。

「やっべえ、遅刻だよ！」木は急いで着替えて玄関に向かった。雨降らしの妹がもう靴を履いて待っていた。

「お待たせ！それじゃあ行こうか！もう遅刻だよ！」

「いってらっしゃーい」とリビングから声が聞こえた。

二人は自転車に乗って猛スピードで学校に向かった。

必死になって立ち漕ぎしている木の後ろから「なんだか妹ができたみたいだなあ！」と言う雨降らしの妹の声が聞こえてきた。

木は息を切らしながら満面の笑みだった。

#2

「やっべえ、遅刻だよ！」

自転車で学校の前の坂を駆け上った。校舎の時計は十時半を示している。

「どうして寄り道したですか」と雨降らしの妹が後ろから尋ねた。

「寄り道なんてしたかなあ！」木はペダルをフル回転させて駐輪場を目指していた。

「公園でブランコしたり八百屋の主人と話したりしましたよ」

「そうかあれか！ぼくは寄り道したのか！」木は自転車を駐輪場につけた。

雨降らしの妹はサドルの後ろについてる段ボールとか乗せるとこに体横向きにして座って木のほうを見ている。

「さあ、学校に着いたよ！ここが学校だよ！急がないと先生怒ってるよ！」

木は手をぱたぱたさせて急ぐように雨降らしの妹を促した。

駐輪場前の階段を駆け上って、校舎に入るとちょうど授業中みたいで廊下はとても静かだった。

「さあ早く早く！」木の声が廊下に響き渡った。

「やっべえ、急がないと遅刻だぞ！」と雨降らしの妹が言った。

「先生！おはようございます！遅刻しました！」

教室の扉を開けると、先生はちょうど黒板に何か書いてるところだった。

「先生、何を書いてるんですか！何の授業ですか！」木は先生に訪ねた。

「面白そうだなあ！」と雨降らしの妹が言った。

「その子は誰だね」と先生は黒板に文字を打ち付けてちらちらこちらのほうを見ながら尋ねた。

「雨降らしの妹です」

「なんだよそれは」と雨降らしの妹が言った。

「変な名前」「雨降らしって木のこと？」「全然似てないなあ」と雨降らしの妹が言った。

「ぼくの妹じゃないよ！雨降らしの妹なんだって！」木は生徒たちに向かって言った。

「どういうことだ」「なんで私が考えたことあの子が言ったの」と雨降らしの妹が言った。

「これはこういう子なんだよ！みんなの考えてることを口にしてしまうんだって！」

「みなさんの考えが筒抜けなります」雨降らしの妹が言った。

「また木が変なの連れてきたな」「いつものことだよ」「可愛い妹だな」と雨降らしの妹が言った。

「まあ、いいから早く席につきなさい。めんどくさい」先生はいつものことだからろくに相手にしないで事態をさっさと収拾させようとした。

「先生、妹の席どこにすればいいですか！」

「今、余ってる机はないからどうするかね」先生が一瞬チョークを止めて眉間に皺を寄せた。

「困ったな、机がないと困ったな」と雨降らしの妹が言った。

「先生！椅子取りゲームしましょう！椅子がないから椅子取りゲームができるじゃないですか！」といって木は楽しそうに教卓の上で足をぴょんぴょんさせる。

「椅子があっても椅子取りゲームはできるけどね」「机はどうするんだろう」「椅子取りゲームしたら自分の椅子わからなくなるからイヤ」

雨降らしの妹が言った。

「そんなことないよ！みんな椅子に雑巾かけてないのか！」「雑巾見ればわかるよ！」

「木雑巾かけてないだろ」「おまえ掃除しないだろ」雨降らしの妹が言った。

「思ったこと全部言われるな」「楽だな」「怖いよ」「楽だよ」「なんだこれは」雨降らしの妹が言った。

「みんな椅子取りゲームするだろ！」

「椅子取りゲーム楽しいのになあ！」雨降らしの妹が言った。

「木早く座れ」「めんどくさい」「妹立ってろ」雨降らしの妹が言った。

「ぼくは座るよ！」「でも妹立ってるの可哀想だろ！」「なあ！」といって木は妹の顔を覗きこんだ。

「じゃあ木が立てよ」と雨降らしの妹が言った。

「そうか！ぼくが立てばいいのか！」「さあ、こい妹よ！ぼくの席はあそこだよ！」

木は雨降らしの妹を自分の席に座らせて、その横に立った。

「木おはよう」と隣の席の有栖川誠が話しかけてきた。

「おう、おはよう！有栖川くん！」「こちら有栖川誠くんだよ！」と木は雨降らしの妹に有栖川誠を紹介した。

「よろしくね」と有栖川誠。

「可愛いなあ、雨降らしの妹ちゃんと付き合いたいなあ」と雨降らしの妹は言った。

「なんだ、有栖川くん！そうなのか！よかったなあ妹よ、有栖川くんが付き合いたいって！」

「ありがとございます」といって雨降らしの妹はこくりと頭を下げた。

「よかった！こちらこそよろしくね！」といって有栖川誠もこくりと頭を下げた。

「茶番だな」雨降らしの妹が言った。

「さあ、先生早く授業しましょう！ぼくはすっかり勉強したくなったよ」木がまた足をばたばたさせて訴えた。

「木うるさい」「立ってるから余計うるさい」雨降らしの妹が言った。

「木、いま何の授業してるか知ってるか」と先生が尋ねた。

「知るわけないよ、どうしたの先生！おかしなこと言うなあ！ぼくはいま来たばっかりなんだよ！」といって木は大爆笑した。

「先生はおかしなこと言うなあ！」と隣で雨降らしの妹が言った。

#3 妹はまだプロトタイプ

「知るわけないよ、どうしたの先生！おかしなこと言うなあ！ぼくはいま来たばっかりなんだよ！」といって木は大爆笑した。

「先生はおかしなこと言うなあ！」と隣で雨降らしの妹が言った。

木はばたっと机から顔を上げた。

「あれー、おっかしいなあ！ぼくは今夢を見てたみたい！」と木が言った。

「木くんどうしたの」と隣からひそひそ声で有栖川誠が心配そうに声をかけてくる。

「ぼくはいま夢を見てたみたいなんだ！雨降らしの妹という反復装置と一緒に登校したんだけどなあ！」

「雨降らしの妹ちゃんならいるじゃないか。どうしたの木くん」

「あれー、おっかしいなあ！どこにいるんだ」

有栖川誠は木のほうを指さして不思議そうな顔をした。「ここにいるじゃない」

「有栖川くんはおかしなこと言うなあ！それはぼくじゃないか！」有栖川誠があんまりおかしなことを言うものだから木は大爆笑した。

「どうしたの木くん、へんだね。ぼくが指さしたのは妹ちゃんだよ」有栖川誠は泣き出しそうな顔をしてきょろきょろまわりを見回して他の生徒に同意を求めた。

すると「妹ならそこにいるのに」「あそこにいる」「ここにいるだろ」「私の横にいる」という声が次々聞こえてきた。

「あっれー、おかしいなあ！雨降らしの妹はどこにいるんだ！声だけ聞こえるぞ！」

「だからあそこにいるだろ」「そこ」「君のうしろ」「真横」「すみのほう」「教室入り口」とまた次々声がした。

「声だけするなあ！どこだろう！あっちこっち言われたら特定不能じゃないか」

「確かにへんだね」「私の前に居るけどこれ違うの」「これも違うのか」「木には見えてないの？」「木おかしいね」

「あっれー、何がなんだかわからないぞ！」

するとぱっと雨降らしの妹が現れた。雨降らしの妹はさっきと同じように木の席に座っている。

「あっれー、おっかしいなあ！妹どこいたの」

「かたじけないです、磁場乱しました」

「どうしたことかなあ！それは」

「たまに乱れますよ。さあ授業の続きをどうぞ」さあ授業の続きをどうぞ。「すみません、まだ少し乱れます」乱れると括弧外れることあります。

「括弧外れるってどういうこと？妹ちゃん」有栖川誠は眉をハチの字にしてとても不安げ。

なんでもないです。「こっちの話です」

こっちってどっちのこと？どういう意味なの妹ちゃん。

「大丈夫です、すぐ戻りますから」内部事情です。

「まあまあ、有栖川くん」いいじゃないか！「またすぐ戻るんだって！」

「木くん、ぼく怖いよ」何が戻ってないんだろう。妹ちゃんはやく戻してね」

まあまあ許してやってくれ有栖川くん！「妹はまだ」プロトタイプだから」

「いざとなれば再起動させます」雨降らしの妹はぺこりと頭を下げた。